

氏 名	くに しげ ゆたか 國 重 裕
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 256 号
学位授与の日付	平 成 15 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学位論文題目	表象のバルカン

——ユーゴスラヴィア内戦に対する西欧知識人のまなざし——

論文調査委員 (主 査) 教 授 西 村 雅 樹 助教授 松 村 朋 彦 教 授 佐 藤 昭 裕

論 文 内 容 の 要 旨

本論は、西欧知識人の言説にみられるバルカン像の解析を研究主題としている。1990年代のユーゴスラヴィア内戦が「いかに語られたか」を分析することによって、「他者」について語る際露わになる西欧の「知」の暴力性を明らかにすることが、この論文の狙いである。したがって本論はユーゴスラヴィア内戦そのものの史実をテーマとしたものではないことをあらかじめ断っておきたい。

西欧社会がバルカンに注ぐまなざしの変遷を歴史的に論じたのがマリア・トドロヴァの『バルカンのイメージ』(1997)である。彼女はサイードの「オリエンタリズム」の概念を援用しながら、バルカンに対する西欧の視線を「バルカニズム」と名づけた。

「オリエンタリズム」という概念については、もはや多言を要さないだろう。オリентという「他者」に出会った西欧が、自らの知の枠組みにしたがって「他者」を回収し、再編成し、それを学として権威づけていく。その表象作業が孕んでいた政治性をサイードはその著『オリエンタリズム』で明らかにしていく。トドロヴァの『バルカンのイメージ』も、その分析手法をサイードの『オリエンタリズム』に依っている。しかしバルカニズムはオリエンタリズムの単なるバルカン・ヴァージョンではない。トドロヴァはオリエンタリズムとバルカニズムとの間にある決定的差異も見逃さない。

サイードによれば、西はモロッコから東はインドまで、多様で複雑な広大な地域を十把一絡げに押し込めてしまうのが「オリエンタリズム」という概念である。「オリент」と名指されている地域と、「オリент」という言葉（のイメージ）の間にはなんら実質的なつながりはない。それに対して、バルカン諸国は限定された地域を指している。

しかしより重要なのは、オリентがヨーロッパの「外部」に位置するのに対して、バルカンはヨーロッパの「内部」に存する点である。オリентがヨーロッパにとって「他者」にすぎなかったのに対して、バルカンはあくまで「近代ヨーロッパの文明化を歩む発展途上の地域」たるべきであった。ところが、バルカンでは民族紛争や政情不安がつづき、挙句、サラエヴォ事件というヨーロッパがそれまで体験したことのない惨事の発火点になった。このことによって、バルカンは西欧にとって、自らが克服したはずの過去、負の遺産がなお息づく土地として嫌悪の対象となったのである。バルカンはヨーロッパの一部であるがゆえに、その影の部分、アルター・エゴと見做されたのだ。こうした近親憎悪に似た感情は「オリエンタリズム」には生じない。またバルカンの側も「みずからもヨーロッパでありたい」という願望を抱いている点が、バルカニズムをより屈折したものになっている。——しかし「ヨーロッパの火薬庫」「民族の坩堝」といったバルカンに対する負のイメージは、近代になって定着したものである。本論の第一章では、トドロヴァの議論を踏まえつつ、西欧におけるバルカン・イメージの形成を祖述した。

「バルカン」が英仏など西欧諸国によって「発見」されたのは19世紀のはじめ、ナポレオン戦争の時期であった。中世、オスマン＝トルコ帝国に征服されて以来、バルカン半島は、強勢を誇っていたオスマン帝国の広大な領土の不可分な一部としてしか認識されていなかった。バルカンは「ヨーロッパ」ではなかったのである。しかし折からヨーロッパで勃興してい

たナショナリズムの影響を受けて、セルビアで反オスマン蜂起が起きると、バルカンは封建的トルコの圧政から解放されるべきヨーロッパの一部であるという意識が芽生えてきたのである。しかしこの頃の関心は、民主主義揺籃の地・古代ギリシアへの憧憬などに基づく多分に牧歌的なものとどまった。

オスマン＝トルコの衰退によって、19世紀のバルカン半島ではセルビア、ブルガリア、ギリシアなどが独立もしくは自治権を獲得した。しかし西欧的な意味での市民社会がいまだ成熟していなかったバルカンにおいては、近代国家の形成過程は、しばしば政情の混乱を招いた。西欧では産業革命を経て、議会制民主主義や法治国家体制が整備されていったのに対して、バルカンでは政争による内紛が絶えず、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、「アドリア海と黒海にはさまれた粗野な無法地帯」というイメージが定着していった。

「ヨーロッパの一部である」と見做されるようになったがゆえに発生する近親憎悪。その感情が剥き出しになったのが、1990年代のユーゴスラヴィア内戦の際、西欧知識人が示した態度であろう。本論では二章以下、具体的にユーゴ内戦に関する西欧知識人の言説を検証した。まず第二章ではファン・ゴイティソーロ、スーザン・ソントグ、ジャン・ボードリアル、スラヴォイ・ジジック、ヴァーツラフ・ハヴェル、ユルゲン・ハーバーマスといった知識人がユーゴスラヴィア内戦について語った言説を分析した。

ゴイティソーロは『サライエヴォ・ノート』において、1993年自らサライエヴォを訪れたとき目の当たりにした街の惨状を描き、それを一方的に「大セルビア主義者の血なまぐさい十字軍」の仕業と断定する。ゴイティソーロによれば、この内戦で破壊されたのは、ヨーロッパの人道主義の理想そのものである。その責任はセルビアの為政者だけでなく、惨状を前にしながら手をこまねいて介入しようとしないう首脳にもある、と彼は批判している。

ゴイティソーロと同じく、西欧の無関心と不介入に対して苛立ちを示したのはスーザン・ソントグである。彼女はサライエヴォに西欧の関心を惹きつけるために、当地でベケットの『ゴドーを待ちながら』を上演する。『ゴドー』の上演は演劇の観客にとってもっと別の意味があった。『ゴドー』がヨーロッパの生んだ偉大な演劇作品であること。そしてサライエヴォ市民自身がヨーロッパ文化の一翼を担っていることである。』ゴイティソーロ、ソントグの両者に共通するのは、西欧の博愛主義に対する信頼である。ユーゴ内戦によって「寛容」と「文化」が危機にさらされている、博愛主義が試されていると彼らは考えた。

これに対してボードリアルは、ソントグの行動を次のように批判した。曰く、ソントグは、テレビの映像で内戦の極限状況を見て、無力なみずからの自責の念や同情を、サライエヴォの人々の悲惨さと交換しに行った無力な知識人にすぎない。しかし「彼らはたくましい。われわれの方は軟弱で、強さと現実感覚の欠落を補うためサライエヴォへ行かねばならない」という発想からは、弱者を装いつつ慈善者の優越感に耽る西欧人の姿が浮かび上がる、と。

ボードリアルはさらに、ボスニアでの「民族浄化」はヨーロッパでこれから起きようとしていることの前触れであるという。道徳上、経済上、民族上統合されつつあるヨーロッパでは、ボスニアのような雑種的存在、同化できない存在は滅ぼされる。ユーゴ内戦へのEUの不介入は、このような未来のヨーロッパの「民主的」原理に基づいて決定されたものだと指摘する。ゴイティソーロやソントグのナイーヴなヨーロッパ的理念への信頼とは逆に、ボードリアルはヨーロッパの名のもとに行われている詐術をユーゴ内戦のうちに看取っている。

ヴァーツラフ・ハヴェルはカナダ議会での演説で、NATO軍によるコソヴォ空爆を正当化して、「人権という原則は、各国の国益に優越する」と述べた。人権という概念は各国の法の上に位置付けられるものであるがゆえに、著しい人権侵害が認められた場合、国連の採択がなくとも、国家の主権を侵害してでも攻撃が認められるというのだ。これに対してジジックは、「ハヴェルの議論の問題点は、軍事介入が暴力の犠牲者のために行われたと説明することで、軍事介入を非政治化し、道徳上の問題にすり替えた点にある」とする。さらに、ヨーロッパ諸国はコソヴォ空爆を、無力な難民の保護のための「人道的介入」と称しているが、コソヴォのアルバニア人を、保護を必要とする無抵抗な住人のままにすることによって、彼らが政治的・軍事的に自立した国民となることを阻止することが西欧諸国の真の意図だとジジックはいう。

ハーバーマスは、カール・シュミットの『大地のノモス』の議論を受けて、国際法の観点からコソヴォ空爆を論じた。すなわち従来の国際法では交戦団体どうしの戦争行為は、それ自体が罪に問われることはなかった。国家は「戦争を行う権利」を有しているので、戦争そのものは合法的なのである。先制攻撃した側を犯罪者とする発想や「戦争犯罪」という概念が生

まれたのは、第一次世界大戦後のことであり、国際法上いまだかならずしも明文化されていない。今回の「人道的介入」は、法的根拠に乏しいまま、世論の道徳的感情がリアル・ポリティクスに利用された感がある。政治の道徳化を避けるためにも、国際法の整備が急がれるとハーバーマスは述べている。

第三章ではエミール・クストリツァ監督の「アンダーグラウンド」(1995)がカンヌ映画祭でパルム・ドールを獲得して以来、この映画が一つの芸術作品としてではなく、「親セルビアのプロパガンダではないか」などといった政治的次元で議論されるようになっていった経緯を、当時の映画評を手がかりに論述した。とりわけ「ヌーヴォー・フィロゾフ」と呼ばれるアラン・フィンキルクロート、アンドレ・グリュックスマン、ベルナール＝アンリ・レヴィといった人々の「アンダーグラウンド」評と、彼らのユーゴ内戦に関する発言と関連づけて分析した。

第四章ではオーストリア出身の作家ベーター・ハントケの『セルビアのための正義あるいはドナウ川、サヴァ川、モラヴァ川、ドリナ川への冬の旅』(1996)が惹き起こした論争を紹介し、何ゆえこの小著にドイツ語圏のみならずヨーロッパ中が拒否反応を示したのかを分析した。ハントケはマス・メディアを、「自らを裁き手・デマゴグの役割と取り違えて、何年にもわたってステレオタイプな言葉や映像を垂れ流している」と批判し、実際にセルビアを旅し、メディアが産出するものとは異なったりアリティーを手に入れようとする。そこには、経済制裁のもと細々と生活の営みをつづけるセルビアの人々の姿が描かれている。そうしたセルビア人の姿を描きながら、メディアが流す「セルビア人＝悪玉説」に疑問符を付していく。ハントケが批判を浴びたのは、戦禍のボスニアではなく、安全なセルビアを旅し、確たる証拠も挙げることなくメディア批判を展開したことに主な原因がある。しかしそれ以上に、作品の随所に見受けられる自然の審美化にこそこのテキストの問題点はあるのではないかと。ハントケは、ただそこにあるだけの自然やセルビアの人々の中に、「美」や「悲しみ」を見出す。何気ない生活風景の背後に大きなものを感じ取る。一面的な反セルビア報道の中で、その偏見を乗り越えようとしたハントケも、結局セルビアの風景に自己を投影しているにすぎず、セルビアで真の意味で「他者」と出会うことはなかったといえる。

ユーゴスラヴィア内戦ほど、西欧的言説が猛威をふるった戦争はなかった。冷戦時代「鉄のカーテン」の向こう側に位置し、一時的に西欧の関心の外にあったバルカンだが、内戦が勃発すると19世紀以来形成されたバルカニズムが安易にユーゴスラヴィアで起きた出来事に結びつけられた。本論では、第二章から四章まで西欧の知識人の言説分析を通じて、そのことを炙り出そうとした。

「ヨーロッパにとり憑いた『過去の亡霊』」(スラヴォイ・ジジェク)を否認する西欧の言説には、むしろ西欧が標榜する価値——民主主義、人権、寛容の精神——を特権化する傾向がなかっただろうか？ つまりバルカニズムとは、内戦に陥ったユーゴという「他者」を理解しようと努めるまなざしというより、みずからのスタンダードの優越性を確認しつつ、ヨーロッパの内なる「他者」バルカンを体よく排除するまなざしではなかっただろうか？ その証拠に、ユーゴ内戦をめぐる西欧知識人の言説には、内戦の当事者たる旧ユーゴの人々の姿が不在である。だがそれは必然の結果ともいえる。なぜなら西欧の「知」は、「他者」みずからもその様式に参入しないと正当な言説とは認めないからである。

内戦をとおしてユーゴスラヴィアの知識人がぶつかった壁とは、いかにこのアポリアをかいくぐるかであった。結論において、スラヴォイ・ジジェク、ドゥブラヴカ・ウグレシッチ、スラヴェンカ・ドラクリッチ、ジェヴァド・カラハサンといった旧ユーゴスラヴィア出身の知識人たちの発言をとおして、多文化的価値をすべて弁証法的に一元化して呑みこんでしまうヨーロッパ的知に対して、いかにして「他者」と出会うことができるかの地平を開くことができるか、その可能性について考察した。

論文審査の結果の要旨

1942年生まれのアート出身の作家ベーター・ハントケについては、現代ドイツ文学でもっとも優れた文学者の一人という評価が定着しつつあった。ところが近年ハントケの著作活動は、その評価をも揺るがしかねないほどのスキャンダルに見舞われている。騒ぎを引き起こすことになったのは、ユーゴスラヴィア内戦をめぐる彼の一連の発言であった。本論文は、ハントケに関するこの論争に触発されて生み出されたものである。しかし論者の関心は、一作家をめぐる議論に留まるものではない。そういう論争が生まれるにいたった歴史的背景への考察、論争を引き起こすことになったハントケの作品へ

の評価、そして西欧知識人のユーゴ内戦をめぐる諸々の発言の分析についても論は展開されている。さらに注目すべきことに、論者の根本的関心は、現代のユーゴという特定の時代と地域を通して、それを越えて、西欧における非西欧的なものに対する知のあり方という問題へ向けられているのである。

西欧知識人によってユーゴ内戦がいかに語られたかを探ることにより、彼らの言説に見られるバルカン像を浮かび上がらせ、他者について語る際あらわになる、論者言うところの「西欧の知の暴力性」を明らかにするという問題設定は、序章で明確に示されている。その際論者は、トドロヴァが『バルカンのイメージ』で提起した「バルカニズム」という概念を援用している。ヨーロッパの外部にあるオリエントとは異なり、バルカンがヨーロッパの内部にあるがため生ずる、両者のいっそう微妙な関係が説得力をもって論じられている。なお、西欧という語が意味する範囲については、以下の章であいまいと思われる箇所が時に見られる。この用語についてこの章で詳しい説明がなされておれば、論旨はさらにわかりやすくなったであろう。

第一章では、オスマン・トルコ支配期から近代にかけて、バルカンのイメージが形成される過程が論述され、さらに補論としてユーゴ内戦にいたるまでのこの地域の複雑な歴史が概観されている。当該地域に対する呼称の変遷、ならびにそれに伴うイメージの変化、あるいはこの地域の多様な民族構成の由来等、以下の各章の議論を理解するために十分な記述がなされている。

第二章では、バルカンがヨーロッパの内部にあるために生まれる西欧知識人の屈折した精神的傾向が問題とされている。ゴイティソーロに見られるヨーロッパの人道主義の理想の破壊への嘆き、ソントグが示す西欧の博愛主義に対する信頼、西欧的理念を素朴に信頼するこの両者へのボードリアルによる批判、人権という原則を国家主権より上位に置くハヴェルの主張、それに反論するジジェクの西欧諸国の人道的介入への批判、さらにはハーバーマスによる国際法の観点からの人道的介入への批判の要点が明快にまとめられ、議論が多面的に俯瞰されている。このうち、ハーバーマスの論が、シュミットの戦後の著作を踏まえているという指摘は鋭い。ただし、ナチズムと複雑な関係にあったシュミットに触れるのであれば、ユーゴ内戦中の残虐行為をナチスによるユダヤ人迫害と重ね合わせて問題にするという、論者があえて取り上げなかった議論についても、言及されていた方が良かったと思える。

第三章では、クストリツァ監督の映画『アンダーグラウンド』をめぐる議論が分析されている。カンヌ映画祭ではきわめて高い評価を受けたものの、親セルビアのプロパガンダとみなされることも少なくないこの映画に関する、フィンキルクロート、グリュックスマン、レヴィ等現代フランスの思想家たちの批評、ならびにそれに対するハントケの批判の妥当性が論じられている。フランス語の新聞や雑誌の記事を探索し読解した労は、十分評価に値する。

第四章では、激しい論争を引き起こすことになったハントケの旅行記『冬の旅』が取り上げられている。ハントケは欧米のメディアによるセルビア弾劾を一方的なものと感じ、それに疑問を呈し、問題の地を自ら訪れ、見聞きし感じたところをこの書物にまとめた。しかし戦禍の巷となったボスニアには足を踏み入れることなく、セルビアのみを旅して、その見聞だけによりメディア批判を行ったこの旅行記は、ジャーナリストや作家たちから一斉攻撃を受けることになった。この経緯を説明した後、論者は『冬の旅』の内容を詳しく分析し、失敗作という評価を下している。それは、ハントケにあっては、審美的主観としての詩人が見る世界と現実の社会・政治状況との亀裂への認識が不十分であったためだという。ハントケはセルビアで、自己自身を確認し、それを審美的に描いたにすぎず、他者との真の出会いをなしていない。この点を論者は問題にし、西欧的知のあり方の限界を示すものと受け止めている。この作品の評価は、現実の政治状況に照らして見るか、世界の永遠なるあり方に関わらせて見るかによって分かれるところであるが、そのいずれかに偏することのない独自の視点から下される論者の評価は、説得力を持つものと言える。

結論と題された最後の短い章において、論者は、西欧からは遅れた地域とみなされてきたバルカンにこそ、多文化的価値を許容しあえるヨーロッパの未来のあり方が先取りされているという、旧ユーゴ出身の知識人たちが西欧で公表した説を好意的に紹介している。この見方についてさらに詳しく検討していくことが、論者の今後の課題であろう。

本論文には、すでに触れたように、望むべき点が多少はあるものの、論全体を見た場合、論者の基本的関心事、すなわち、自らの基準に基づいて他者を裁き他者との真の出会いを不可能にすると論者がみなす、西欧的知のあり方の問題性は、よく明らかにされていると言える。本論文は、ドイツ文学研究の分野でこれまであまり類を見ないほど広く他の領域にも関わる

という点で出色のものであり、問題意識の鋭さを感じさせる意欲作として高く評価できる。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2003年4月8日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。